2Ma-6

# 衣生活におけるリサイクルの問題について（4）

玉田　真紀（尚絅女学院短大）

**目的**　大量生産、大量消費型社会以前、衣服は無駄にできない物として扱われ、着用から再利用、廃棄まで考えて繰り回し使いきる工夫をしてきた。布は貴重な物と考える価値観も、作り直す技術も伝承しにくい今日、廃棄物は深刻な問題となっている。今後、循環型の社会をめざすために生活者と産業や社会を繋ぐためのシステムを探り、提案することを本研究の目的とする。前回までは、生活者の衣服を処分する意識と、東北６県の市町村自治体の資源回収ルート及び回収後の再利用の実態について把握した。それらを通して、大規模な繊維・アパレル産業での生産規模との大差を感じ、従来のウエス、中古衣料輸出、反毛素材への再利用だけでなく、新たな展開の必要性を感じた。そこで報告(4) として、繊維・アパレル産業でのリサイクル活動への取り組みについて調査し、現状における問題点と可能性を考察した。

**方法**　(1) ｲﾝﾀｰﾈｯﾄにより繊維・ｱﾊﾟﾚﾙ・寝具・ｶｰﾍﾟｯﾄ産業のﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞを検索し、リサイクル活動や製品の開発事例を収集し、更に質問紙により活動実態や問題点などを調べた。(2) 日本化繊協会、ｻﾞ･ｳｰﾙﾏｰｸ･ｶﾝﾊﾟﾆｰ、全日本寝具寝装協会、環境生活文化機構にリサイクル活動への取り組みについて調査し、関連資料を収集した。調査期日は、平成11年5月から12月。(3) 前回まで収集した資源回収ルートと再生業者の実態調査結果と比較検討し、現状の問題点を考察した。

**結果**　ウールでは、ウール比率の高い紳士スーツの回収を中心としたウールエコサイクルと、ウール比率にこだわらずユニフォーム回収を中心として一般衣料まで展開しつつあるウールエコネットワークの２つの大きな活動があった。合成繊維は、LCA 的に見ても有効なナイロン６のケミカルリサイクルが展開されており、付属品も同一素材としたユニフォーム製品になっている。ポリエステルはマテリアルリサイクルが可能だが、現実にはﾍﾟｯﾄﾎﾞﾄﾙの回収量の増加に伴い、その再利用の需要先として期待されており、様々な衣料やカーペットとして製品化されている。複合素材はほとんど反毛素材か固形燃料となり、新しい加工製品も見られた。今回複数の活動が見られたが、従来からある再生業者との繋がりが薄いこと、生活者には構造が見えにくいこと、リサイクル製品は全般に高く生活者に普及が難しいことなど問題が見られた。